この邸宅はフランス人の地質学者であり技師であったエミール・テオフィル・ムーシェ(1845－95)のために 1872 年，生野に建てられた。フランス人建築家の M.J.レスカースにフランスのコロニアル風(植民地様式)に設計されていて，生野鉱山で副指揮官として働くあいだ，ムーシェ，彼の妻，そして 5 人の子供が住んでいた。彼のフランスへの帰国後，その家は 1888 年に神子畑へ移され，財務省の役人によって管理事務所として使われた。その翌年その使用は宮内省に移され，天皇家の象徴である菊の瓦が今も屋根を飾っている。

2004 年，神子畑鉱石精錬工場の閉鎖後，ムーシェの邸宅は博物館になった。その展示品の中には古い工場の写真，鉱石や鉱物のサンプルや選鉱作業を描く立体模型がある。また，1987 年の閉鎖直前の工場を示すビデオもある

建物には何度かの改修が見られるが，最初建てられたときとほぼ同じ状態で残っている。元の窓と雨戸は手をつけられておらず，元の外観に合うよう塗装されている。1992 年，ムーシェの邸宅は兵庫県の文化遺産に指定された。